

『はっこいリターンズ！ ～ミステリアス声優は上手く喋れない～』

特典シナリオ台本

【登場人物】

夏藤なゆ

――人前だと喋れない声優の卵

時音女子高等学校一年生。

コミュニケーション下手な声優の卵。

物静かでミステリアスな雰囲気を持つ。

人前ではぼそぼそと喋るが、

電話口やマイク前では普通に話せる。

声優を目指しており、自作のボイスドラマなどを配信している。

年齢…15 身長…153（ちいさめ）

血液型…A B型 バスト…B

【あらすじ】

時音女子高等学校に入学してしばらく経った『私』

ある日の放課後、帰ろうと歩いていると誰かの視線を感じる。

振り返ると、そこにはクラスメイトの『夏藤なゆ』がいた。

「…つけてないです」

そう言いつつも『なゆ』は『私』の後ろをついてくる。

不器用な彼女の言葉に耳を傾けてみると、

どうやら『私』と話したそうにしている…？

一周目の世界では、

話しかける勇氣さえなくて『私』と接点を持てなかった『なゆ』。

タイムリープした二週目の世界では、

『私』との恋を成就させるため、勇氣を出してアプローチをします！

口下手だけど愛らしい彼女とのストーリーをお楽しみください！

【第一話…つけてないです。】

○放課後・廊下

入学式から数日後。

所用で居残ったあなたはひとり教室をでると、

誰かに見られているような視線を感じる。

後ろからぎこちない足音が近づいてくる。

音の方向へ振り返る。

「……（視線に気付いて）
え、あ……」

そのまま立ち去ろうとするあなた。

後ろから足音が近づいてくる。

またあなたは振り返る。

「（少し驚いて）おっ……」

「……………なんですか？」

「…つけてないです」

「…私も、帰るところなので」

「（動き出すのを待っている）……」

「…どうぞ。お気になさらず」

後ろから足音が近づいてくる。

また、あなたは振り返る。

「…だから、つけてないです。
方向、一緒ですし…。
下駄箱に向かってますし……」

「……変ですか？ 私が？」

「……何かある……といえば……」

「………あります……けど……」

「（緊張で言葉が出ない間）……」

「あー……」

「………は、話しかけようと…思って」

「………あなたに」

「………私、同じクラスの夏藤なゆ、です」

「………あなたの名前は、知ってます」

「……それは……ずっと……」

タイムリープしてきたことを言いそうになるが、やめる。
話そうとするが話のネタが思いつかない。

「（考える間）………」

「（絞り出すように）………ゲームとか、します？」

「………やっぱり、なんでもないです」

「……それじゃ」

なゆ、その場から走るように立ち去ってしまう。

○下駄箱

なゆ、下駄箱で靴を履いている。

あなた、独り言が聞こえるので、影から耳を傍立ててみる。

「はあああー……。さいあくだ…」

「『ゲームとか、します?』ってなんだよお…。さすがに0点の質問すぎる」

「…全然しゃべれなかったなあ。

いや、話しかけただけでも、よくやったよ上出来だよ」

「時間はあるし、ちょっとずつ仲良くなっていけば…。

いや、そんな悠長なこと言ったらいつまでたっても…」

「(頭を抱えて) んーーーー」

なゆ、立ち上がって

「…よし。明日から本気出すっ」

「(あなたの視線に気づいて) …ん?」

「え!?! え、えええっ!」

「…あ、ごめんなさい。

驚いて、変な……」

「いや……。」

い、いつからそこにいました……？」

「……もしかして、聞いてました？」

……さっきの……独り言」

間。

「（乾いた笑い）ははっ……。」

聞こえちゃいましたかあ……はははー……」

「……さよなら」

なゆ、その場から立ち去ろうとする。

あなたは、それを捕まえて

「きゃっ！ な、なんです！

……離してください、お願いします……！」

「（ぼそっと）あー、消えていなくなりたい……」

「（普通に話しかけてきたのに答えて）え……？」

あ……ゲーム……好き、なんですか？」

「……最近、興味があるんですね。

（話を聞いての相槌）うん……うん……。」

……話せる人、探してたんですか……？」

「……わ、私も、その、割とやって……。」

学校で話せる人ができたらいいなと思って……。

それで……」

「好きなのはFPS……。」

……え、えっと、一人称視点でドンパチするゲームです」

「基本、なんでもやります。

パズルでもアドベンチャーでも音ゲーでも…」

「……も、もしよかったら今度…」

「…………オススメ、教えます」

「そこまで詳しいわけじゃないですけど、面白かったの、いくつか……」

「……うん。…うん。

……は、はい。

今度は、正面から話しかけます」

「……それじゃ」

「……また、学校で」

なゆ、その場から駆け足で立ち去っていく。

少し経つと戻ってきて

「……独り言、喋ってたの、誰にも言わないでください」

なゆ、また走っていく

【第二話…偶然、ですね。】

○図書室（昼）

後ろから近づいてくる足音。

振り返ると、そこには、なゆがいる。

どうやら話しかけようとしているみたいだが…。

「（息を潜め見つめている）…。」

「（目があって）ふぁっ！…！」

（口塞いで）あ、えっと…すみません」

なゆ、ゆっくり近づいてきて

「急に目があったから…。
声出ちゃいました」

「…図書室ではお静かに、ですね」

間。

「…あー…。その…。」

…「こんにちは」

「こんなところで…偶然、ですね」

「…つけてないです。」

全くもって偶然中の偶然です。

…「借りてた本を返しにきて…」

「…えっと、読んだのは…あー……。最近SF小説にハマっててー…。タイムリープもの、とか」

「(気づいて)もしかして……。先生がさっき授業で話していた本、探しにきたんですか…?」

「(ぼそっと)真面目ですね、相変わらず。……私、場所わかります」

なゆ、周りを見渡して

「たしか、このあたり……。上の方……。あ、ありました」

なゆ、背を伸ばして本を取ろうとする。

「(背伸びして)んんんんんん……。…」

「んんんんんん……。あともう少しでとど……。いや無理…」

「…身長が足りない。
台持ってこようかな」

「え? 自分で……。?」

あなた、なゆに近づいて本をとる。

「(近づいてびっくりして)…ひっ! ちかっ……。な、なんでもないです」

「本、とれました……。?
…よかったです」

なゆ、あなたと距離を取って

「そうですね、
私より身長高いですもんね」

「…最初から頼んでおけばよかった。
……空回り」

なゆ、気を抜いてよろけてしまい、

「わっ、わっ！」

その場であなたに向かって寄りかかる。
その振動で本棚から数冊本が落ちてしまう。

「ご、ごめんなさい、よろけて…」

「私は、大丈夫です…。
大丈夫、なんですけど…」

「……あ、その…、今、近くて…
ちょっと大丈夫じゃないかも…です」

「あ、ほ、本！戻さなきゃ…！」

なゆ、散らばった本を手に取り
本棚に戻していく。

「…調子が、狂うんです。
あなたというと」

「……思ってもみない方向に、自分が行っちゃう」

なゆ、本を棚に戻し終える。

「……お騒がせ、しました」

「(言い出そうとして言い出せない間)……」

「……あ、えっと……」

まだ何かある、というか…」

「この間の……」

「……オススメ、メモしてきました」
……そうです、ゲームの」

「こういう系統が好きかわからなかったので、
思いつく分だけ、書いてみました」

「……どうぞ」

あなた、紙束を渡される。

「書いてたら、楽しくて結構な量になっちゃって…」

「無料もあるし、
全然、気になるのからやってもらえたら…」

「(勇気を振り絞って) あ、いや、ここは……」

「…一緒にやりますか？ ゲーム……。
オ、オンラインとかで……」

……私が、教えるので…色々……」

「…ほんとですか？
あっ、ありがとうございます…」

「……どうかししました？」

「あ、そ、そうですね。」

連絡先交換しないと一緒にできないですね……」

「……スマホ出します」

お互いにスマホを出して、交換する。

「……送ります……送りました」

「……受け取りました」

「……あとで……。連絡、します」

【第三話…：マイク越しで喋って。】

○あなたの家（夜）

休みの日。あなたとなゆは、オンラインゲームをした後通話をする。

人前だと緊張していたなゆだが、

ゲームをプレイした後の興奮もあって、流暢に話せている。

「…もしもし。」

声、聞こえてます？

「…こっちも大丈夫です」

「飲み物取ってきました。」

ずっと喋りっぱなしだったから喉が乾いて…」

ペットボトルの蓋を開けて、炭酸水を飲む。

「（ペットボトルから口を離して）

ぶはあ…！ 復活」

「誰かとチャットしながらゲーム、久しぶりで…。

楽しいです」

「基本ソロプレイですね。」

一度始めると、のめり込んじゃうタイプで」

「今日一緒にやったゲームは、やり慣れているので大丈夫ですけど、
普段は基本黙々とやってます」

「話すぞ！というモードにならないと会話できなくて…。

独り言は…出ちゃうんですけど（苦笑）」

「…変なやつだと思いました？ 最初」

「笑わないでください…。

話しかけるの、本当に緊張したんですから…」

「……うん。

……え？

話しかけようと思ったのは。

思ったのは……」

「昔、一瞬、喋ったことがあって」

「（小さい声で早く）あ、でもこれはそうか、まだ…」

※一周目の世界で会話した時の記憶を喋ってしまったている

「ああっ、えーっと……。

きっと覚えてないと思うので……」

「でも、その時くれた言葉に救われたんです。

……はい。内緒です。…今は」

「…あ、そうですか？

学校で話す時と違います？」

「私、マイクの前だと、緊張しないで話せるんです。

話すこと、声を出すこと自体は好きなんですよ」

「（声が綺麗だと言われ）

え……？ 私の声？」

「良い声、ですか？

……それは、どうも。ありがとうございます」

「……声優。

（恥ずかしそうに）はい……。

実は、ちょっと目指してたり……します」

「うわー……恥ずかしい……」

「恥ずかしいですよ。」

だって、こんなこと、誰にも話したことないし、
どの面下げて言ってるんだって…。
ああ……」

「（深呼吸して）すううー……はあ……。」

……はい、落ちつきました」

「んー、今は個人で配信やったり、
シチュエーションボイスを録ったりするくらいで…」

「養成所入りたいんですけど、まだ親に話せてなくて…」

「……ちょっと怖いです。」

でも、怖がってばかりじゃ、何も始まらないってわかってるんです」

「……うん、うん。」

まあ声優になる以前に、
コミュニケーション能力がなさすぎる問題もありますけど」

「……はい。」

だから、おかしいんですよ。
あなたとはこうやって話せてる……話たいと思っている……ことが」

「…そうですね。」

もう良い時間ですし、そろそろ切りましょうか」

「……あ、その……」

「こ、今度は、オンラインじゃなくて、リアルでも……」

「いや、えっと……たとえば……どこか遊びにいくとか」

「……ダ、ダメですか……?」

「……ほんとに？」

「……うん、うん……」

「今度の日曜日……」

全然！ 大丈夫です。

よ、よろしくお願いします……!」

「詳細は……また……」

はい……おやすみなさい」

切ったつもりになっているが、そのままになっている。

なゆの独り言が聞こえる。

「はあああ……」

え？ え……?

うそでしょ……誘っちゃった、誘えたよ、私！」

「うわ……あ……」

どうしよう……遊ぶやくそく、しちゃった……！
いやあ、すごい進歩だよ、うん」

「……あー。いやいや。」

なゆ落ち着いてー。

むしろここからだもんね」

「(ため息ついて) はああ……」

夢だ、夢。ふふふっ、はははっ……」

「(ぼそりと) ……声、褒めてくれたな。また……」

「(切れてないことに気付いて)

……ん？ あれ？ ちょっと待って？」

「えっ、えっ!？」

まだ、繋がったまま…？」

「…………あの、えっと、

聞いてたんですか？…ずっと？」

「(項垂れて) ……あ~~~~…これはきついです……」

「うん、じゃないです…!

一言かけてくれたっていいじゃないですか…!」

「忘れてください、ほんとに。

何も聞かなかった、ということには……ならないですかそうですか」

「ううう……。

い、いいいい……。

いじわる!」

通話が切れる。

【第四話…はじめてのお出かけ。】

○商店街・時計塔

第三話からまた時間が過ぎ…。休みの日。

なゆと遊びに行くことになったあなた。

時音町の商店街・時計塔の付近で待ち合わせることに。

なゆは、下を向いてソワソワしながら待っている。

「……あっ。こ、こんにちは……」

「全然、待ってないです…！

一時間前、くらい…？」

「は、はいですか？

……着いてないよりは…いいかなと」

「そうですね。……どこに遊びに行くか……」

「歩きながら、考えます…？」

なゆとあなた、歩き始める。

なゆの緊張が伝わってくる。どこかぎこちないデート。

「え、あ、その、えっと……。

き、今日、晴れてよかったですね…」

「……過ごしやすくて……」

「ねー……（作ったような笑い）ふふふっ」

「……は、はい。きんちようしてますよ…。

二人きりでお出かけですし」

「いや別に、他の人も欲しかったわけじゃなくて…。

（小声）二人きりでいいんですけど……」

しばらく沈黙で歩く音だけが聞こえる。

二人とあるカプセルトイの機械の横を通り過ぎる。

「（何かを見つけて反応して） あっ、あー……」

「いや、そのガシャに、好きなキャラがいて…」

「はい、ファミくまって言うんですけど……。…そうです、いつもつけてる熊です」

ポケットからファミくまを取り出して

「配信とか実況者界限で今じわじわと人気になってるんですよ」

「（呟くように） アクキーの第一弾、この時期に出たんだ」

「……見て行ってもいいですか…?」

二人、カプセルトイの機械の前へ

「うわ……!!」

やっぱりこれ一番最初のやつだ……！
うわ……マジか……」

「あ、す、すみません…
つい、テンション上がってしまっ

「（恥ずかしそうに？） ……回してもいいですか？」

「…このニコーって、笑ってるファミくま…：イイナ」

「…：よし、いきます」

なゆ、お金を入れてカプセルトイを回す。
出てきたカプセルトイを手に取って開ける。

「…これは…：。」

ニヤニヤしてるファミくま…：
…：これはこれで可愛い」

「…もう一回、いいですか？」

カプセルトイを回して開けてみる。

「…：しょぼしょぼ目…」

カプセルトイを回して開けてみる。

「…：ニヤニヤ…：ダブった…：」

「この辺でやめておこつかな…。
うん、いきましょう」

歩き始める二人。

「…：そんな、じっと見つめないでください。
…：私、何かしました…？」

「ああ、別に元気がないとかではないんですよ？
ただ、引き弱いなあって…」

「いいんです。」

こういうのって、やめ時が肝心なんです。
当てるまで引いたら、果てしないし」

「求めすぎると沼にハマっちゃうので」

「…ハマっているといえば、

もう、別の沼にはハマっちゃってるんですけど」

「…なんでもないです」

なゆ、立ち止まって

「…いりますか？

ファミくま……」

「二つ、出ちゃったので。

ニヤニヤ顔のよければ…」

「……せ、せっかくだからつけますか……？

お、お揃い？……みたいなの？」

「……あ、カバンに、ですか？

そしたら……私も」

二人、カバンにファミくまのキーホルダーをつける

「（うれしくなって思わず）ふふふっ」

「……ん？ なんです？

え、このファミくま、私に似てます？」

「そ、そんなに笑ってました……？ さっき」

「…：もう、まじまじと見ないでください。
(ぼそっと) …嫌、ではないですけど」

「こういう、お揃いのものつけるとか、
やったみたかったんです」

「同じの引けたから、お揃いにできました。
そっか、そう考えたら…」

「意外と引き強いかも」

ぽつりと、雨が降ってくる。

「(滴が頭に当たって) ん？
あれ？」

「もしかして、降ってきました…？
さっきまで晴れてたのに…。通り雨？」

「傘、持ってきてない…。あれだけ晴れたのに…」

「…やっぱり、引き悪いかも…！」

雨が本降りになってくる

「わわわっ！

と、とりあえず近くのどこかに…」

「あ、あそこに漫画喫茶ありますけど…？
いいですか？ じゃあ、そこで…！」

二人、急いで漫画喫茶へ向かっていく。

【第五話…：伝えたくて、ずっと。】

○漫画喫茶・室内

第四話の続き。

雨宿りのため漫画喫茶に入った二人。

防音の個室は、二人でいるにはちょっと狭い。

なゆ、飲み物を持ってくる。

「飲み物、持ってきました。…どうぞ」

なゆと私、飲み物を飲む。

「(熱いために息を吹きかけて冷ます) ふー、ふー……」

「(飲み物を飲んで一息ついて) ふう……」

…あんな激しく降ってくるなんて」

「勢いで漫喫に入っちゃいましたけど…大丈夫でした？」

「私はよく来ます、ひとりで」

「漫画読み放題だし、ネットはできるし、ドリンク飲み放題だし…。特にここは防音なので、ちょっとした録音もできます」

「…私が録ったボイス、ですか？」

ありますが…：興味、ありますか？ ほんとに…？」

「…：聞きたいですか？」

んー…：…じゃあ、ちょっとだけ…」

なゆ、スマホをいじり始める。

「あ、画面は見ちゃダメです。

私のチャンネル、配信とかもしてるので…」

「…はい。音声だけお楽しみください」

「…準備、できました。イヤホン、片方どうぞ」

なゆ、あなたにイヤホンを片方に貸す。

■ なゆのシチュエーションボイス（お姉さま）

以降、なゆのシチュエーションボイスを片耳で流しながら会話。

「これは、シチュエーションボイスというやつで」

「ネットでフリーの台本を公開している人がいて、
それを読んです」

「これは……。お姉さまに妹が可愛がられるという、
いわゆる百合的なもので…」

「（途中で切って） ……はい、ここまで。

……こんな感じです」

「……ふふっ。面と向かって褒められると嬉しいものですね」

「もちろん、まだまだって思いますけど…」

「（話を切り出すため勇気を出す間） ……」

「（意を決して） あ、あの……。

ちょっと聴きたいことがあって…」

「その……れっ、恋愛とかってしたことありますか?!
人を、好きになったり……とか……!」

「……あ、あくまで参考にしたいな、と」

「え……? 過去に恋人とかいなかったんですか……?」

「(ぼそっと) こんなに可愛いのに」

「……そっか、じゃあまだ誰とも付き合っていないんですね。
(小さく聞こえないくらいで) ……よかった」

「……でも、いつかは恋、するかもしれない、ですよね?」

「今はまだ想像、できませんか?」

「……そういうものですよね。
好きって気持ちを自覚するまで、わからないですよね」

間。

「……けど、自覚しちゃったら最後、
嘘みたいに意識し過ぎて、頭の中がその人のことでいっぱいになる……」

「……と。思います、きっと」

「え、あ、私ですか?」

そ、そ、そんな経験、ないですよ?」

「………ないです」

「そういうゲームはやったことありますけど……」

「演技にリアリティを持たせたいので、
いつかは…って思ってます、いつかは…」

「…恋バナ、しちゃいましたね。柄にもなく…」

「（立ち上がって）飲み物、追加で持ってきます…！」

あ、そういうば、ソフトクリームとかもあるんですよ、ここ」

「何があったかな…？ バニラとチョコと…」

なゆ、足元がぐらついてずるっとこけてしまう。

なゆ、あなたに寄りかかる形に。

「…きやつ。す、すみません、足がもつれて…」

「…き、急にくっついちゃって、すみません。すぐ、どきますね……」

なゆ、そう言いつつもどここうとしない。

「（あなたの肌に触れて高揚して固まってしまう間）……」

「は、はい。わかってます。…はなれます」

「（頭ではわかっているのに身体がいうことを聞かない葛藤の間）……」

「……はなれます」

「（感情が溢れてきて整理できない間）……」

「……どうしたら、いいですか？」

「……はなれようとしてるんです。

してるんですよ…。でも、…このままでいたくて」

「…こんなことするタイプじゃないんです、私。
おかしくなっちゃったのかも」

間。

「……一度は諦めたのに、諦めようとしたのに、
……こうして話せるだけでも十分のはずなのに…」

なゆ、緊張で涙目になってしまう。

「なんか、涙、出てきちゃった」

「……大丈夫です。自分で拭きます。
メガネ、ちょっとおきますね」

なゆ、メガネを外して近くのテーブルにおく。

「（息遣いが聞こえる距離）ここまで近いと、…メガネ越しじゃなくても、
よく見えますね……顔」

なゆ、あなたの唇に、そっと優しく、キスをする。

「（離れて）……」

「今日、こんなことするつもりじゃなかったんです。
ただ、普通に遊べたらいいなって」

「……なのに……。…私、いけないことをしてしまいました」

「……とめられなくて、ごめんなさい……。
嘘ついて、ごめんなさい」

「（今まで我慢していた言葉を口にするまでの間）……」

「好きなの。好き」

「……それを、あなたに伝えたくて……ずっと。ずっと……」

間。

「……今日は、もう、帰りましょうか」

二人、荷物をまとめて部屋から出ていく。

■第五話「：伝えたくて、ずっと。」：シチュエーションボイス（お姉さま）

舞台は架空のお嬢様学校。

憧れのお姉様（18）に見初められた主人公（15）が

夜、お姉様の部屋に訪ねてくる、というシチュエーション。

扉をノックする音。

「いらっしやい、どうぞ中に入って」

「こんな時間に訪ねてくるなんて、
どういうつもり？」

「：眠れなかったの？
ふふっ、全く可愛い妹ね」

「もう、そんな目をされたら…。
抱きしめたくなる」

「もっと、近くに。
いいから、早く」

お姉様、私を抱きしめて

「ふふふっ。
どう？」

憧れのお姉さまに抱きしめられた感想は？」

「：まあ、頬が赤いわ。
逸らさないで。良く見せて頂戴」

「何、恥ずかしいの？
それとも嬉しい？
…：両方？」

「ふふふっ。

今日の体育の授業、
窓から私のこと、見ていたでしょう？」

「…気づいていたわよ、もちろん。
あんなに熱い視線を向けられたら、嫌でもわかる」

「…気持ちを隠さないで。
そのまま伝えて？」

「…よく言えました。
今日は一緒に寝ましょう」

「…あなたは私のもの。
誰にも渡したりしないわ」

【第六話…：変わっていききたい。】

○神社（放課後）

第五話以降、ちょっとだけよそよしくなってしまった二人。

なゆに神社に呼び出されたあなた。

あなたは、イヤフォンをつけて

なゆのチャンネルの配信を見ながら待っている。

■なゆの配信の音声

「…こんばんはー。

配信はじまりましたー。

…音、聞こえてますか？」

「お、聞こえてる？

ビージーエムもこのくらい？

…うん、おっけーみたいだね、よし」

「まあ、いつもの雑談枠なんだけど…。

今日はねえ…：。んー、ちょっと悩み事相談、

というより懺悔かも」

「私、最近、

…大事にしている人を、傷つけたかもしれない…」

「その人は、昔からずっと話してみたくて、

でも勇気がなくて、眺めてるだけだったんだけど、

最近ようやく話せるようになったんだよね」

「私なんかとも仲良くしてくれて…。

この間、ついにね、遊びに行ったんだけど。

その時、ちよっと暴走しちゃって」

「…自分の感情をぶつけすぎちゃった。
相手のことを考えずに。
それ以来、少し気まずくて……」

「……その人とね、
明日話すことになって」

「(ぼそっと) ……あーあ。
嫌われたくないなあ……」

「でも、このままでもいたくないなんて…。
…ひどい話」

「…湿っぽくなっちゃった。
ここだけの話だよ」

「みんな、ありがとう。
色々と気持ち整理できた」

「……がんばるから、私」

実物のなゆが到着し、話しかけてくる。
あなたは映像に夢中である。

「……お待たせしました……」

「何、みてるんですか…？
って、え！ ええ！ ちょっと！
それ、私の配信……！」

あなた、イヤホンを外す。

「ど、どうして見てるんですか…！
チャンネル、教えてないのに…！」

「…よくみつけた、というか、みつかったというか……。さつき見てたの、昨日の配信したやつですよね…？」

「はあ……」。

なんだか見られたくないところばかり、見られているような気がします…独り言とか」

「……でも、それでも、私と一緒にいてくれるんですよ…」

間。

「急に呼び出してすみません。時音神社だったら、人気、あんまりないかなって」

「…観光で訪れる人はいますけど、地元の人はほとんど来ないから」

「…まず、はじめに。」

「…ご、ごめんなさ…いや、違う違う」

「（深呼吸してから）……ありがとうございます」

「学校で話したり、

ゲーム一緒にしたり、おでかけしたり…。私と仲良くしてくれて、嬉しかったです」

「普通にそのまま過ごしていたら、私たち友達になれていたと思うんです」

「それなのに、急に告白して…」。

「…キスまで」

「……うん。…うん

……優しいですね、ほんとに。

そんなあなただから、私、好きになったんだと思います」

「（震えて）……気持ちを伝えてしまった以上、
元の関係に戻ることはできません…」

「きっと、この好きって気持ちは消えないから…。
だから……」

「もし、これからも私と一緒にいてもいいと
ほんの少しでも、思ってくれるなら…」

「……お試しでもいいから、……付き合って欲しいです」

「…無茶苦茶言ってます、…正直。
こんなこと言っちゃえる自分に驚いてるくらい…」

「……リアルでの会話が苦手なもの、
養成所に行きたいって親に話せてないのも、
……一歩、踏み出すことができなかったから」

「……私、少しずつ変わって行きたい。
そう思えたのは、あなたのおかげ…」

「もう、私……。…後悔はしたくないんです」

なゆ、あなたに手紙を渡す。

「……手紙、書いてきました」

「……読んでください。

……返事、待ってます」

【ボーナスストラック…：夜に待ち合わせ。】

○夜の公園

後日談。

手紙を読み、なゆの気持ちを受け入れ、お試しで付き合い始めた二人。
夜、なゆからの連絡で公園で待ち合わせることに。

「よっ…：です」

「…こんばんは」

「さっき、ついたところです。
待ち合わせにもなれてきました」

「ふふっ

もう一時間前にはきません（笑）」

「何してたんですか？ さっきまで。

…ああ、宿題出てましたね、そういえば」

「私は…：半分は解いてて、

もう半分は授業前にやるつもりです」

「家では勉強したくないんですよ。

ゲームとか配信したいので…」

「突然、呼び出しちゃってすみません。

なんだか、…会いたくなってしまうて」

「…：特権行使しているみたい。

まだ、お試し期間なのに…」

「…会いたかったですか？
…なんて」

二人、あたりの散歩し始める。

「夜に会うの、はじめてですね。
通話は、してましたけど」

「この公園、昔からずっとありますね。
小さい頃はよく遊んでました」

「今でもたまに、夜中に何か無性食べたくなった時とか、
こっそりコンビニ行って、そのベンチで食べてる時あります」

「たまにですよ？たまに。
親が仕事でいない時とか…」

「…：そういえば私、この間、親に話しました。
養成所に行きたいって…」

「…はい。返事はまだ貰ってないんですけど、
はじめて自分のやりたいこと話したので、
びっくりはしました」

なゆ、あなたの手をとって

「…：勇気をくれて、ありがとうございます」

「話すきっかけもそうですけど…。
私が声優を目指すきっかけも…：はい」

「昔…：…っていうか日付的には未来なんですけど、
ふふ、何言ってるんでしょうね。
でも、言ってくれたんです。声が綺麗だねって」

「あの時、すべてに自信がなかった私にとって
…その一言で、世界の見え方が変わった気がしました」

「何もできなかった前の私はもういません。
…いま、夢をみているようです」

「…もし夢だったとしても、良い夢です。
起きててもまた、会いに行きますね」

間。

「…明日、日曜日ですけど、
何かありますか？」

「…あの、この前話していたゲーム、買っちゃって…」

「そうです！
うちにコントローラーあるので、
二人で同時プレイできるんですけど…やります？」

「あ、いや、うち、今日親いないので、
気を使わなくても大丈夫なので…」

「…だから、その、二人っきりって形になりますけど…」

「…ヘンなことは、しませんよ？
…しません、たぶん」

「大丈夫です！ 本当に！
今日は制御できますから！」

「純粹にゲームやりたいんです！
二人で！ ほら、いきましょー！」

「……つれこみじゃないです！
……もう！ふふふっ」

【ボーナスストラック…：はじめてのお泊まり。】

○なゆの部屋（夜）

ゲームをして遊んだ二人。

結局遅い時間になってしまい、

そのまま、なゆの部屋にお泊まりすることになって…？

「…：連絡、できました？」

「泊まること…。」

大丈夫そうですか？」

「…よかったです。

ごめんなさい。

ゲームに熱中しすぎて、時間忘れちゃって…：」

「ふふっ、そうですね。

お互い様」

「…：着替え、それで大丈夫ですか？」

私、ちゃんとしたパジャマとか持ってなくて…：」

「オーバーサイズのＴシャツに短パンで寝てるんです」

「ほら、私の格好も…。」

ふふっ、お揃いですね」

「ですよね！

ファミくまのＴシャツ、かわいいですよね！
せっかくなので、着て貰いたくて…：」

「これ喜怒哀楽で四種類あるんですけど、全部持ってて…」

「（じーっとみて、ぼそりと）……。」

「可愛い人が可愛いものを着てるって最強ですね…」

「…今のは、独り言です。」

聞かせても良いタイプの」

「……ベッドの方、使ってください
私、布団敷いたので」

あなた、なゆのベッドの中に入る。

「……電気、消します」

なゆ、部屋の電気を消す。

なゆ、自分の布団に入っていく。

「……おやすみなさい」

しばらく沈黙の時間が流れる。

隣でもぞもぞする音が聞こえる。

「……………まだ、起きてますか？」

「……………なんだか眠れなくて」

「……………そっち、行っても良いですか？」

なゆ、あなたのベッドの中に入ってくる。

「……………あ、あったかい」

「こっちの方が余計に寝れなくなりそう……。
……冗談です」

「……どうですか？
私と付き合ってみて……」

「……うん。……うん。
ちょっと慣れてきました？」

「そうですね……。
はじめてのことばかりです。
お泊まりも、一緒にベッドに入ったのも……」

「……きっとこれからも、
まだまだ私たちの知らないはじめてを経験するんでしょうね」

「……はい、楽しみです。
……一緒にしましょうね、いろんなこと」

「……おやすみなさい」

「……（寝息を立てる）」

【ボーナストラック…私をみて？】

○なゆの部屋（朝）

朝。もぞもぞと起きるあなた。

スマホを手にとって、時間を確認する。

しばらく弄っている。

「（寝返りをうつ声）……うんん」

なゆはまだ寝ている。

あなたはイヤフォンを装着して、

なゆのチャンネルのシチュエーションボイスを聴き始める。

■なゆのシチュエーションボイス（同級生）

シチュエーションボイスを聴いてる間になゆが起きる。

「（ゆっくり目を覚まして）……んん。

（伸びをして）んんん……」

「……おはようございます」

「…ん？」

あ、また、私のチャンネルみてる。
しかも最近あげた奴…」

「ちょっと、無視しないでください」

なゆ、あなたのイヤフォンを片耳外して
なゆ、あなたの耳に近づいて

「(ぼそっと) ほら、本物の私はこっちですよ？」

「…そっちが無視するなら、
振り向かせますから」

「意地悪するのがいけないんですよ？」

「(小さい声で恥ずかしそうに)
……………すき」

「……………すーきっ!」

「(息を吹きかける) ふーっ」

「あ! ニヤツとした!」

「(息を吹きかける) ふーっ」

「ふふふっ。

…そろそろ、いい加減にしてください。
じゃないと…………キス、しちゃいますよ?」

なゆ、キスをする。

あなた、イヤフォンを外してなゆを見る。

「あ、やっとこっちみた…」

「…その…………私のチャンネル、
気に入ってくれたのは嬉しいんですけど、
私という時は、私に集中して欲しいというか…」

「…………欲張り、ですか？」

「……そっちらも……。キス、してくれたり……」

「あ、いやすがにこれは」

あなた、なゆにキスをする。

「（キスされて）んっ……」

「……」

そんなことされたら、私、期待しちゃいますよ？」

「お試し期間の後のこと……」

「うん……うん。」

……はい、正式に」

「あなたの恋人にしてください」

「……ふふふっ。」

（耳元で）これから、よろしくお願いします」

■「ボーナストラック」：私をみて？」「シチュエーションボイス（同級生）

同級生の女の子と一緒に遊ぶ約束をして、

自宅に二人きり。約束通りゲームをしようと準備をするのだが……

「ちょっと、本当にゲームするの？」

「いや、ゲームは好きだんだけど、

最初はさ、本当に一緒に遊ぼうと思って誘ったんだけどね」

「今、その、二人きりだよ？」

「モニターじゃなくて、私を見てほしいな」

「ほら、コントローラー置いてさ、私の手を握って」

相手の手を握る。

「どう？ゲームよりドキドキしない？」

「なんて、私の方がドキドキしてるんだけど」

「あー、ちょっと恥ずかしいね。

指先までドキドキしてるかも」

「あなたはどうか？」

「手、あったかいね……」

「うーん、指からはドキドキはわかんないかな。

（小声で）手繋いでるままでも良いんだけど……」

「えい！」

抱きしめて胸に相手の顔を埋める。

「ふふ、やっちゃった。私のドキドキ聞こえるかな？」

間。

「あー……、駄目だ。恥ずかしくて顔見せられないかも。多分耳まで赤くなってそう。」

「それでも結構勇気出してるんだからね」

「って、わかるか。もう聞いちゃってるもんね。すっごいドキドキしてるよね……」

「あなたのドキドキも聞かせて欲しいな……」